心を結びつける言葉の力

サーラ・ワイダー

私は、これまで「言葉の力」について何度も何度も考えをめぐらせてきました。言葉とはいったい何なのだろう、言葉にはどんな力があるのだろうと。そして、どうすれば言葉が、「励まし」（encourage）と「理解」（appreciate）の不可欠の一部になれるのだろうかと。

励ましと理解――それは、どんな時でも、なかんずく大きな惨事に見舞われた時には、絶対になくてはならない精神の徳だと思います。

3月11日の大震災と津波に見舞われた東北の皆様は、このことを深く実感しておられることでしょう。東北の方々は知っておられます。個人を力づける上でも、社会を力づける上でも、「励まし」がどんなに不可欠のものであるかを。また、何が起こったのか、そして何が起こりつつあるのかを深く「理解」することが、どんなに必要であるかを。そうした理解を得ることで、人は、直面している深刻な課題に立ち向かうことができるのです。

東北の皆様は、そうしたことを教えてくださった、

被災者への連帯の思いと祈りを込めた講演は、深い感動を与えた

私たちの先生です。今日は、皆様から私が学んだことの幾つかをお話しさせていただきたいと思います。

東北の皆様は、筆舌に尽くせぬ、耐えがたい出来事を体験してこられました。それにもかかわらず、人生を前に進む力を見つけられました。そして、２０１１年の「3月10日」の時点では想像もしなかった出来事を語る言葉を見つけてこられたのです。その力はどこから来たのでしょうか？　そのような言葉は、どこに息づいているのでしょうか？

言葉に込められた「物語」

この問題に向かう前に、まず「言葉とは何であるか」について、ご一緒に考えてみたいと思います。私は、まだ文字が読めないほど幼かったころから、文字の「形」に完全に魅了されていました。父の辞書をぱらぱら開いては、意味もわからないのに、そこに書いてある文字を書き写しました。それは絵入りの辞書で、私はその絵が、文字の形とともに大好きだったのです。絵は、子どもにとって、ちょうどいい大きさだったため、

私は絵と文字をごっちゃにしていました。学校に入学し、読むことを習っていた時、学校の先生は書き文字を使った面白いゲームを私たちに教えてくれました。アルファベットを組み合わせて、まず言葉を作り、その言葉に輪郭を描いて、何の形に見えるかを考えるというゲームでした。言葉が建物になったり、言葉の下に車輪を付けると電車やトラックになったりしました。私は、言葉のつくる形そのもの、言葉が立体的になっていく変化を見るのが好きだったのです。言葉は単に紙の上の平面的なものではなかったのです。

私が、こんな幼いころのささやかな思い出をお話ししたのは、言葉がいかに生き生きとした、親しいものであるかを讃えたかったからです。言葉というものは生涯、私たちに連れ添い、私たちの想像力を育てようとします。そう、私たちの想像力は生涯、成長し続けなければなりません！

皆様もここでぜひ、ご自身の人生にとって大切な言葉を思い出して、書いてみていただきたいと思います。その言葉に込められた思い出を想起してください。そして、お隣に座っている方と向き合って、その方が書かれた言葉にどんな物語が込められているのかを聞いてみてください。そして、あなたもご自身の人生にとって大切なその言葉について話してほしいのです。

私は、子ども達が初めて自分の声を使って、自分なりの言葉を発した時に見せる喜びについて考えます。その言葉はやがて、周りとコミュニケーションを取れる言葉になっていきます。私がかつて、ニューヨーク州のイサカという街の大学院に通っていた時のことです。ある日、街路で、ふと小さな男の子の声が聞こえてきました。4歳になるかならないかの坊やがお母さんと手をつないで、歩道でスキップをしていたのです。その子は、自分に向かって、そしてお母さんに向かって、韻を踏んだ言葉を思いつくかぎり歌にしていました。彼にとって、言葉とは、どこにでも持っていける素晴らしいおもちゃだったのです。これは、もう25年以上も前のエピソードなのですが、私には今でも、喜びに満ちたその男の子の声が聞こえてきます。彼にとって、一つひとつの言葉がそれぞれの韻律で響くとき、言葉

たちが互いに楽しくあいさつをしているかのように聞こえ、それがうれしかったのです。

言葉に現れる「その人の自画像」

英語では、人が最初に出あった言語――それは最も身についた、しっくりする言語です――のことを“Mother tongue”（母語）と呼びますが、これは自然なことです。多くの人にとって、言葉にまつわる最初の思い出は、お母さんと過ごした時間の中にあるのですから。また、人のアイデンティティと言語がとても密接に関係しているのも不思議なことではありません。たとえば、私たちは声の違いによって人を識別できます。人はそれぞれ独自の指紋をもっていますが、同様に、その人だけの声紋というものがあります。同じようなことが、言葉の使い方にも言えます。たとえ同じ言語を使っていても、言葉の組み合わせ方はそれぞれであり、そのスタイルがその人の自画像を示しているのです。エマソンは「詩人」という随筆の中で「人間であるだけではまだ自分自身の半分にすぎず、あとの半分が表現なのだ」（酒本雅之訳）と書いています。エマソンは（彼の講演を聴く）聴衆や読者に、その「あとの半分」を探求してほしかったのだと思います。なぜなら、表現というものは、私たちの秘めた可能性に、つまり自分で思っている以上に私たちは何かに貢献できるのだということに、深く関係しているからです。

私は、言葉がもつ力についてよく考えますが、思索はしばしば「言葉にできないことは何だろうか」という問いに変わります。英語でもよく、ある体験について「言葉にできない」とか「それに対しては言葉もない」という言い方をします。また、言葉足らずになって、言葉のもつ力を十分に発揮させられないこともあります。言葉は、ちゃんと使えば、大きな力をもっているのですが。

ですから、人間社会ではいつも、語られたことと実際に起こったことの間には、大きなギャップがあるのです。では、どうすれば言葉を「意味のない抜け殻」や「他人を利用するための危険な道具」にしたりせずに、正しく使えるのでしょうか？

実行してこそ「正しい言葉」になる

もう一度、言葉のゲームをしてみましょう。英語では“justice”（正義）という言葉の“just”の部分に「真実の」とか「正しい」という意味があります。一方で、“just”には「～だけ」とか「単に～にすぎない」といった意味もあります。たとえば、「それは口先だけの言葉だ」という意味で、“It's just words”と言ったりします。そう聞くと、皆様は「言葉というものは無益な、役立たずなのだ」という〝言葉への不信感〟が英語の中に忍び込んでいると思われるでしょう。しかし、この話し言葉としての“just words”という表現が（「単なる言葉にすぎない」という意味ではなく）「正しい言葉」を意味する場合もあるのです。それはすなわち正義をもたらす言葉であり、各人が尊厳をもって遇される、つまり誰もが真価を理解されることを保証する言葉です。

私は、２００６年に初来日した際、あるところで「正しい理解というものが、いかに正義の基盤となるか」について対話しました。私はそれ以来、理解と正義の関係について考えてきました。

言葉は、あらゆる形や大きさで現れます。言葉は単なるページ上の印でもなければ、空気をふるわせるだけの特定の音でもありません。さまざまな姿をとり、なかには、まったく書きとめられない言葉もあります。言語とは実に多次元のものなのです。「音楽は普遍的言語だ」とされていることも、多くの人が知っています。音楽は、言葉が通じない者同士をも、やすやすと結びつけるのですから。

私は、言葉に秘められた歴史が大好きです。英語の“word”（言葉）という単語は、ずっと昔には「約束」という意味ももっていました。これは現代でも、“a man is as good as his word”（男子に二言はない）という言い回しの中に残っています。つまり、「約束を守る人」という意味です。言葉は――真実の言葉であれば――必ず実行されるものなのです。口先だけの約束で、実行しなければ、それは真実の言葉ではありません。１８２８年、エマソンは講演で“words are things or nothings”（言葉とは実体をもつ〝もの〟である。そうでなければ〝何もの〟で

もない）と語っています。（thingsとnothingsをかけた）彼の言葉遊びは日本語にはうまく移せないかもしれませんが、意味はおわかりいただけるでしょう。話したにせよ、書いたにせよ、その言葉に言葉以上の何らかの力が込められていなければ無意味なのです。言葉が意味をもつには、その場限りのものでなく、より永い生命をもたねばなりません。言葉は何らかのリアルな現実とつながらなければならないのです。現実と切り離されれば、言葉は萎び、息絶えてしまうのです。

母を蘇らせた「ひとこと」

そのような、現実の中で生きている、いわば立体的な言葉について、少しお話しさせていただきます。と言っても、難しい話ではありません。なぜなら皆様がすでにご存じのことであり、皆様ご自身の体験からも他の例を挙げられるはずですから。【以下、紹介されている体験は各地の創価学会員のもの】

２０１１年7月16日、中野三夜子さんとお嬢さん（長女の増田智恵子さん）は双葉町の実家に一時帰宅しました。わずか2時間だけでした。おふたりは、こみ上げる思いと直面する難題に押しつぶされそうでした。戻ることのできない自宅から何を持ち出すべきか、生きるのに本当に必要なものとは何なのか――そんなことをどうやって決めればいいのでしょうか。とても不可能なことに思えます。しかし、中野さんのお嬢さんの行動と言葉が、その不可能を可能なものに、そして現実のものにしたのです。お嬢さんは、舞踊の着物と扇を包みながら、言いました。「お母さんに必要なのは、これでしょ」。お嬢さんは、母親をよく理解し、お母さんにとって何が大切なものなのかを知っていました。そして、母親が創造性と慈愛の心を周りにどのように表現していたかを、お嬢さんはよくご存じだったのです。中野さんは、舞踊グループに所属して、老人ホームやさまざまな街のイベントで踊りを披露してこられました。それこそが、過去20年の間、中野さんが続けてきた励ましの行動だったのです。その間、母娘がどんなふうに生きてこられたかを想像してみてください。そして、思いをめぐらせてください。おふたりが直接

知ることはなかったかもしれませんが、どれほどたくさんの人が彼女の踊りによって励まされてきたかを。

しかし、そんな彼女の励ましも、あの3月11日の後は、いとも簡単に「あれは昔の話」となってしまっていたかもしれません。そうなって何の不思議もありません。ところが、お嬢さんのかけた言葉が、その言葉の力が、かつての中野さんに呼びかけ、中野さんがこれから成り得る姿に呼びかけたのです。中野さんは、立ち直る力を体の中に感じました。「また踊ろう！　また踊りで皆に希望を贈ろう！　希望の種をまいていこう！」。中野さんは、自分と同じように双葉町から退去を余儀なくされていた30人の仲間とともに、再びさまざまなイベントで踊りを披露するようになりました。

舞踊は力強い言葉です。観客に生きゆく活力を語ります。忘れ得ぬ物語を伝えます。観客は、受け取ったその物語を、それぞれ自分の人生に当てはめていくのです。そして、人間として出あう最大の困難というものを踊り手自身が体現している時――その時は、私たち観客も、魂の中で彼らとともに踊ることができる、いえ、踊らなければならないのだと私は思います。

「分かち合い」「支え合う」言葉

言葉とは何かについて私たちの理解が広がると、言葉の力というものを、さまざまな場所に見つけられるようになります。言葉は生命を支える栄養であり、これよりも大切なものがあるでしょうか？

私の故郷・ニューメキシコ州には、プエブロ（Pueblo）と呼ばれる（ネイティブ・アメリカンの）集落がいくつもあります。そこでは多くの祝宴の日があり、女性たちがおいしい食事をたくさん用意するのです。この習わしはずっと昔に始まったもので、集落のだれ一人もお腹をすかせたままでいないようにするためです。少しでも多く食糧を持っている人は、その分、たくさん皆に振る舞うのです。自分に余裕がない時でも、皆が分けてくれますから、心配いりません。いつか余裕ができたら、それを皆に分かち合えばいいのです。食べ物は恵みです。それを通して、コミュニティーの中の皆に力が行き渡り、今度はその力が世界へと流れていく

のです。女性たちは料理が全員に行き渡るよう、一緒に食事の準備をします。その中で、おしゃべりをしたり、笑ったり、悲しみを分かち合って癒されたりするのです。それらすべてが、この料理には込められています。そして、こうした美しい心の要素こそが、身体的な栄養以上の糧となって、皆を養い、力づけるのです。

このことは、茨城県大洗町の「かあちゃんの店」（大洗町漁業協同組合直営）を再建した高橋早苗さんと大洗の女性たちのことを思い起こさせます。彼女たちもまた、コミュニティーの心というものをよくご存じでした。そして、何が地域を支え、何が地域を再建させるのかを知っておられました。漁業で支えられている街では、みんなが協力し、支え合っています。高橋さんは、女性が漁業協同組合に加入することすら許されなかった時代から、女性も漁業協同組合に参加できるよう尽力してこられました。そのおかげで、女性たちの仕事が認められただけでなく、女性同士が一緒に働ける場所ができたので、団結がより強くなったのです。また、ここから、〝町民でも外から来た人でも、町のいのちである魚を食べて楽しめる場所をつくろう〟という新たな発想も生まれました。

あの津波が「かあちゃんの店」を壊滅させ、漁業に大損害をもたらした時も、高橋さんと大洗の女性たちは、破壊されたものの再建に懸命に取り組みました。私は、高橋さんの地域復興の体験を読んで、こうしたとき女性がどれほど大切な存在であるかと、胸を打たれました。

高橋さんはこんなふうに言われています。〝大洗の女性は団結し、支え合っています。私たちは、同じ漁業という仕事をしているので、支え合う精神というものは自然に育っているんです。漁業は、協力作業がないとできませんから。この支え合いの精神があったからこそ、店も早く復興できたのだと思います〟

「支え合う精神」。この言葉は「励まし」というものの核にある魂を鮮烈に表現しています。この言葉にはさらに〝大きな目的に向かって、ともに働き、力を合わせることで生まれた絆〟という意味が込められていると思うのです。

「詩は『人間』と『社会』と『宇宙』を結ぶ心」

高橋さんが、「支え合う精神によって団結した女性たち」について、そして女性たちによる励ましについて話された時に、私がすぐに思い起こしたのは創価学会婦人部の皆さんのことでした。日本の婦人部の方々、そして（アメリカの）池田国際対話センターを通じてお会いしたアメリカの婦人部の方々と語り合って、私はこの「支え合う心」をはっきりと感じました。さらに、目の前のなすべき行動に対して、繰り返し決意しては挑戦を重ねていく強さを感じたのです。

ここで、２００６年に私がお会いした婦人部の皆様のお話をしたいと思います。それは、私の初めての日本訪問でした。私は普段から学術会議などで論文を発表していますが、そういう時の聴衆は、たいてい私の話に興味をもって公平に聞いている一方で、心を開いて内容を知ろうとするよりは、批判的な態度を崩さないことが多いのです。私はそれまで、聞き手が話し手を積極的に応援し、話しやすい雰囲気をつくっているのを見たことは、ほとんどありませんでした。しかし、創価女子短期大学では、生徒たちがハート型の飾りを部屋に運んできて、私を歓迎してくれたのです。そうやって皆さんが迎え入れてくれたので、私は安心して、まるで友人と話しているようにお話しすることができました。

私は、エマソンが、最も難しい考えを人に伝える時に心がけるべきことは何かという話をしていたことを思い出しました。難しいことを伝えるには、論理で固めた文章を書くのではなく、友人に手紙を書いているかのような言葉で書きなさいというのです。エマソンは「友情」という随筆の中で、「学者は坐って書きものをしようとする、ところが、長年瞑想の生活はつづけてきていても、そのことはただ一ぺんの良い思いつきも美しい表現も与えてくれはしない。そのときは友達に手紙を一本書く必要がある、――そうすれば、たちまちあらゆる方面にやさしい思想が大挙して現れ、選りぬきのことばで装いをこらすものである」（入江勇起男訳）と述べています。また同じ随筆の中に、「私ども

の知性と行動の力は愛情とともに強まる」（同）と記しています。たしかに、創価女子短大の生徒たちが誠実に心を込めた歓迎で私に愛情を示してくださり、関心をもって聴いて、質問したり、自分の考えを話してくださったことで、私も自分の考えをよりうまく引き出せたのだと思います。

数日後、私は横浜で5百人の女性とお会いしました。そして、彼女たちの生き抜く勇気を知って、「私たちは深くつながっているのだ」と感じ、その思いは今も胸から消えることはありません。その日、私は日記にこう書きました。

――（通訳の）アンジェラが私の話を訳している間、私は女性たちの顔を見ていた。彼女たちと一緒に話を聞き、訳される日本語をともに聞いているかのように感じ、うれしかった。彼女たちは私の眼を見て微笑み、うなずいてくれた。涙を浮かべている人もいた。5百人の女性たちが皆「私たちが世界の平和をつくっていくのだ。世界はそれを待っているのだ」という思想に一生懸命に耳を傾けていた。この日のことは、ずっと私の心の中に生き続けるだろう。私は、この瞬間をずっと忘れないでいるだろう――

２００９年に私が再び来日した際には、女性平和委員会の方々にお会いすることができました。ここでもまた、大変に勇気づけられました。平和委員会の方々も「支え合う心」をもって集まっておられました。彼女たちと一緒に座り、彼女たちが今まで平和のためにしてこられたことをうかがいました。私は、彼女たちのそうした行動から力をいただいたように感じました。彼女たちは、第二次世界大戦を生き抜いた女性たちの体験談を集め、大切に保管する作業をしていました。そして、（ＤＶＤを製作して）女性たちが自分自身の言葉で語った戦争体験が、世界中に発信されることを可能にしたのです。また、彼女たちが製作した平和のための力強い展示会は世界中で開催されています。日本国内でも、若い委員の方々が〝今の青年が世界をどのように見ており、平和を築くために自分たちに何ができると考えているか〟などを調査しているそうです。

こうしたお話をうかがっていますと、私は、彼女た

ちはまさに詩人であり、その詩心から平和への行動が生まれ、つくり出すものもまた詩になっていると感じました。池田SGI（創価学会インタナショナル）会長は、詩と詩心について美しく定義されています。私たちが、何が「真実の言葉」を生み出すのかを知りたいと思い、どうすれば言葉が創造的な力をもち続けるのかを知りたいと思うならば、この定義以上の答えはありません。

1988年、第10回の世界詩人会議に池田会長が寄稿された「『詩――人類の希望』――詩心の復権への一考察」にはこうあります。「詩は『人間』と『社会』と『宇宙』を結ぶ心である」。そして、詩が生まれる源について「私は、この豊饒（ほうじょう）なる精神の泉を詩心と呼ぶ」とおっしゃっています。さらに、「詩心は、人間の想像力と創造力の源泉である。それは、この地上に夢と希望と勇気とをはぐくみ、調和と融合をもたらし、何びとも侵すことのできない力をもって、内面世界を荒れ地から沃野へと転じゆく」と述べておられるのです。

苦難の中、言葉が「詩」に変わった

言葉というものは、万人にとって、そして私たち一人ひとりにとって、どんな力をもっているのでしょうか。私が大好きなアメリカの詩人の一人は、「詩は決して贅沢品ではない」と言っています。つまり、詩は、誰にとってもなくてはならないものであり、特定の人だけではなく、すべての人に関係があるのです。詩がなければ、私たちは自分の内面的にも、他者との関係においても、崩れ果ててしまうでしょう。けれども実際のところ、詩はなくなりません。いつも存在しています。たとえ、しばし見失うことがあったとしても、詩は常住する泉なのです。無尽蔵で、湧き上がり続ける源泉なのです。この「創造力の源」「イマジネーションの力」は、どの瞬間にも働き続けているのです。

たとえば、（宮城県登米市の小学生）及川大喜君の体験があります。（聖教新聞社の「小学生文化新聞」主催・第42回作文コンクールで、「負けない心」の作文が最優秀賞に。南三陸町に住んでいた及川君は、大好きだった祖父を津波で亡

くしてしまったが、2日後に遺体が見つかった。その時に祖父が身につけていた腕時計は、まだ動き続けていたという内容)。大喜君は、おじいちゃんの腕時計から「止まってはいけない、進みつづけろ」という励ましの言葉が聞こえてきたというのです。これも、ひとつの詩がそこに現れた瞬間ではなかったでしょうか。

「がんばろう! 石巻」――あの有名な巨大看板の言葉にも、詩があります。看板は津波の後の廃材で作られましたが、それを作った男性自身が、凍るような水の中で木にしがみつき、命からがら助かった人です。彼(黒澤健一さん)は、職場も家も失いました。それでも、負けてたまるか、絶望するなと、街の人たちに励ましを送って歩いたのです。

エマソンは「どんな言葉もかつては詩であった」と言いましたが、このような(困難な)状況の中で、言葉はいかに大いなる励ましの詩へと変わることでしょう。詩は、その人が知っているもの、ずっと知っている(身近な)ものから勇気を引き出してくれるのです。今の自分は、以前には想像もしなかったほど変わり果ててしまった――そんな時にも、詩は、私たちの過去をほめ讃えてくれます。そして、すっかり勇気を無くしてしまった人たちに、再び未来へと進む力を与えてくれるのです。

「心の財(たから)は壊せない」

英語の「励まし」(encouragement)という言葉は、字義通りに言えば、「勇気(courage)を与える」という意味です。耐え忍ぶ力、そして行動を起こす力を与えるのです。人を励ます時、私たちは、相手がどれほど大変な経験をしてきたのか、あるいは今も経験しているかを受けとめます。(アメリカの女性詩人)アドリエンヌ・リッチ(Adrienne Rich/1929 - 2012)は「苦難のさなかにある友へ」という詩の中で、相手に「何があったの?」と聞くことが一番大切な質問だと記しています。相手を受けとめ、話を聴こうとすることによって、私たちは「理解する」(appreciate)という言葉の本当の意味を体験するのです。相手が味わってきた体験を、そのありのままの姿で、そして相手が求めているかたちで、

深く尊重することです。同時に、その人の心そのものに語りかけるのです。英語の「勇気」(courage)という言葉は、「心」とか「生の本質」という意味の昔の言葉からきています。もしかしたら、それは「生命力」と同じものかもしれません。いずれにしても、この励ましという行為は、人々の心へ届き、人生をよい方向へ進ませるための、尊く大切なものなのです。

詩心と、詩心が放つ励ましは、私たちが前進しなければならない時に、その力の源になるものだと思います。あのような津波の被害を思う時、やはり私も、二度と戻ってこないもののことを、まっさきに考えてしまいます。愛する故郷や家は、もう二度と同じ姿を見せてはくれません。中野さんがおっしゃっていたような「故郷の青い海、緑の畑、夏の蛍、くれないに染まる秋の山々」もそうです。愛する人たちを突然に、そして理不尽に奪われてしまい、なにげない話を交わすこともできなくなりました。その変わりようは、あまりにも大きいものでした。しかし、それ以上に大きかったのは、その後の「心の中の地震と津波」だったことでしょう。絶望的に思える変化に見舞われて、心がくじけ、精神的にも混乱してしまったかもしれません。心の景色まで荒れ地のようになってしまった方もいるかもしれません。また、周りの殺伐とした風景がそのまま心の中に投影されているように感じた方もいらっしゃるのではないでしょうか。心の支えはすべて折れ、胸中は押しつぶされて、生気を失ってしまったかもしれません。壊された町の、こんなにも粉々になった破片の中から、一体何が再生できるのだろう？　私たちはそう思ってしまうかもしれません。この破壊から、生き延びたものは何でしょうか？　変わらない何かがあったでしょうか？　そんなものがあるという可能性を、どうしたら私たちは信じることができるのでしょうか？

私は、池田会長が震災直後に書かれたメッセージを思い起こします。池田会長は、日蓮大聖人の「心を壊る能わず（心は壊せない）」（『日蓮大聖人御書全集』65頁）との言葉を引いて、いかなる災害に遭っても「『心の財』だけは絶対に壊されません」と言われました。この心

こそ詩心であり、まさに人間の創造力の源です。それこそが、池田会長が詩人会議で言われた「何びとも侵すことのできない力をもって、内面世界を荒れ地から沃野へと転じゆく」詩心の力だと思います。

「沈黙」という癒しの「言葉」

それでは、何が詩心の力を私たちに感じさせるのでしょうか。これは最も難しい問題かもしれません。力は確かに存在しますが、私たちはそれを感じられるとはかぎらないからです。そんな時、私たちの感覚は麻痺してしまって、心の鼓動とその生きた流れを感じとれなくなっているのです。

ここで私の学生の一人、ジェニー・マグレガーさんが最近語ってくれたエピソードを紹介したいと思います。ここまで私は、はかりしれない喪失の際の「言葉」の力について話してきました。しかし、ジェニーさんは、時には「沈黙」こそ最も大切な「言葉」であるということを思い出させてくれました。

ジェニーさんのお母さんが子どものころ、仲の良いお友達がいたそうです。しかし、そのお友達のお母さんがある日、突然亡くなりました。お友達は、まだ11歳でした。思春期に入ろうとしている11歳の子どもです。こんな一番難しい時期に、母親の死を受けとめるのは、決して簡単なことではありません。彼女は何もしゃべらなくなってしまったそうです。でも、ジェニーは言いました。「沈黙することによって、彼女は次第に癒されていったのです」。少女にとって、何か話すということは、あまりにもつらいことでした。ジェニーのお母さんは、その友人のことをよく知っていたので、沈黙がどんなに彼女に必要かを理解しました。そして、クラスメートの女の子たち全員が「友達を支えるための連帯」――ジェニーの表現です――をつくって、だれかがからかったり、無理にしゃべらせようとしないように、その子を護ったのです。

このエピソードの中に、私は「理解」と「励まし」が深く結びついた実例を見ます。11歳の少女たちは、友人の状況をよく理解して、自分たちが「こうすべきでは」と思うことを押しつけませんでした。つまり、

その友がどんな嘆き方を「すべき」か、母親を喪った苦しみからどう回復「すべき」か、そういうことについて自分たちの考えを押しつけるのではなく、大変な状況にある友の気持ちを尊重し、その子が自分で一番良いと思うやり方で回復できるよう見守ったのです。皆が彼女に敬意を払い、彼女を理解しました。そうすることで彼女の回復に必要な励ましを届けることができたのです。自分は皆に支えられている、護られていると感じられる空間を作ることで、彼女の中の「荒れ地」が「沃野」へと戻っていけるようにしたのです。

やがて言葉を取り戻した時、彼女は言ったそうです。「皆が、何も言わず、そばにいて、自分を護ってくれたことに本当に感謝しているわ」と。

間違いなく、この子どもたちは、「人と人とを結ぶ心」という池田会長が定義された「詩心」というものを実践したのです。子どもたちはこの詩心を体現して、友に心を配り、友の心の中の「豊穣なる精神の泉」を掘り起こしたのです。

詩は「生きる上で不可欠」な必需品

「理解」と「励まし」とが生き生きと結びつくところに存在する詩心――その重要性を考える上で、私はアメリカの詩人たちの声を紹介したいと思います。池田会長が愛読されたエマソンやホイットマンを中心にお話ししたいところですが、今日は20世紀から21世紀にかけて生きた3人の女性詩人をご紹介したいと思います。

1976年、ミュリエル・ルーカイザー（Muriel Rukeyser/1913 - 1980）は、アメリカ詩人アカデミー（the Academy of American Poets）での講演で「私たちが自分たちの体験を共有したい、何らかのかたちにして誰かに伝えたいと思う欲動。それこそが詩なのです」と言っています。

同じころ、先ほど触れた「詩は決して贅沢品ではない」という言葉をタイトルにしたエッセーを書いたのは、オードリー・ロード（Audre Lorde/1934 - 1992）です。その中で彼女は、詩がどれほど「生きる上で不可欠」

な必需品であり、特に女性にはなくてはならないものかを論じました。彼女は書いています。「詩は、私たちの内なる光の質を高めてくれます。その光のおかげで、私たちは生き抜き成長していくための希望や夢を生み出せるのです。その光は、まずは言語として、次いで思想として、やがてもっと具体的な行動として表れていきます」

そして20年後、先に触れたアドリエンヌ・リッチは「詩と公的領域」という会議のうち、「詩と（多様な）フェミニズムと困難な世界／言葉」（Poetry, Feminism(s) and the Difficult Wor(l)d）というパネルディスカッションで登壇し、「詩が、詩であるかぎり、その本質に《解放する》働きをもっている」と述べました。

3人のどの言葉からも、詩がどれほど必要不可欠のものかわかります。詩とは「解放」するものであり、詩の目指すところも、その役割も「自由」にあるのです。詩が贈ってくれる光に包まれて、私たちは希望を抱き、夢をあたため、その実現に向かって行動できるのです。

詩を通して「エネルギーを与え合う」

今日は、この3人のうちひとりについてだけお話しします。それはミュリエル・ルーカイザーについてです。詩を通しての彼女の活動は、20世紀の大部分にわたっています。彼女によれば、詩とは、排他性から完全に解放されたものです。つまり、詩は、選ばれた者だけが手を染めるものではないのです。詩はすべての人のものです。詩は、詩の源が常にある場所へ、すなわち民衆へと戻っていくのです。私がなぜ彼女のことをここでお話ししようと思ったか、おわかりでしょう。「民衆の」そして「民衆のための」彼女の詩は、池田会長の詩に、また詩心についての会長の思想に通じるように思えるからです。

ルーカイザーにとって、詩は、人と人とのつながりにおいて中心的な位置を占めるものでした。つまり詩は、他者と何かを分かち合おうと願い、ともに行動するときに生まれるものなのです。ある種の言葉だけが詩なのではありません。言葉の組み合わせというより

も、もっと広く、たくさんの関係が結び合わされたものなのです。彼女が言うように、詩とは、他のすべての芸術と同様、「エネルギーの与え合い」なのです。彼女は、エネルギーを他者と交換し、与え合うには、どのようにそれが流れればいいか、非常に深く配慮していました。

彼女は自身の人生においても、これを重視していました。大恐慌によって、お父さんが破産し、彼女は大学を続けられなくなりました。ジャーナリストになった彼女は、その仕事を生活の糧としてだけではなく、社会のために果たすべき責任と使命としてとらえていました。彼女は、正義を叫ぶ社会の動きを追いかけ、報道しました。11人の黒人男性がふたりの白人女性を暴行したという冤罪（えんざい）で告発された事件もそうです。ウェストバージニア州で鉱山災害が起きた時も、取材し、リポートしました。ベトナム戦争では、平和を主張し続けました。彼女がベトナムを訪問したのは、軍が認めた人間以外、アメリカ人は誰もいないはずの（危険な）時期でした。彼女は「働く民衆とともに」「働く民衆のために」書いたのです。「特権」をもつ人たちのためではなく、あらゆるアメリカ人の人権を護るために働いたのです。

彼女は自分の仕事にとって、詩が重要な役割をもっていることを知っていました。１９４９年の詩集『詩の生命』（*The Life of Poetry*）では、詩を受けとる側の役割について考察しています。「その人たちを呼ぶのに『聴衆』『読者』『聞き手』などの言葉はふさわしくないと思います。それよりも、古い言葉ですが『目撃者』を使いたいのです。この言葉には、自らの体験として何かを見たり知ったりしたのだという意味が、そして、それについて自分は証言するのだという意味が込められています。この言葉がもっている〝責任感〟のニュアンスが、ほかの言葉にはありません」

彼女のこの言葉は、詩は一人では作れない、少なくとも一人では詩に命を吹き込み、生きたものにすることはできないと教えてくれています。彼女は読者の私たちに明確な役割を与えているのです。その役割を果たすのは時には困難なことでありますが、同時に励み

にもなる役割です。つまり、私たちは、詩の中に生きている、いえ、生きていなければならないのです。私たちが自ら見てきたこと、経験して学んだことが大切なのです。それとともに、詩は一人で読むだけのものではありません。読む側には、証言する使命があるのです。詩で読んだものを語らねばなりません。他者との「エネルギーの与え合い」を続けなければなりません。著書『詩の生命』のいたるところで、彼女は「詩とは『一連の作用』(process)なのです」と述べています。(詩は書かれた時点で終わるのではなく、読み手を証言者として、人から人へとつながり、力を与え合っていく)一連の作用であり、行為であり、過程なのです。このプロセスは「分かち合おう」という強い思いで互いのエネルギーを与え合う人間同士の絆を基盤としています。

池田会長夫妻との語らい

ルーカイザーにとって、詩はこうしたプロセスを意味します。「分かち合う」ことが、その特徴です。このプロセスにおいて、「励まし」がどれほど不可欠のものか、私は自分自身で体験しました。6年前に池田会長と奥様にお会いした時、私は「詩は、エネルギーを与え合う一連の作用である」という詩の定義を、まさに実体験したのです。

お会いしている間、そこにあったのは、時計では計れない時間でした。時が消えた時間でした。その時、私は、ご夫妻が絶え間なく続けられてきた平和建設のお仕事――そこにこそ、いつもご夫妻の心があり詩心があったと思います――の長いプロセスの中に包み込まれていました。

ここで「仕事」という言葉を使うと、どうしても苦しいネガティブな印象がつきまといます。大変だ、重荷だ、疲れてしまう……私たちは「仕事」について、いつもこぼしてしまいます。けれども、ご夫妻はこの「仕事」を尽きることのない喜びとして感じておられるのでした。

おふたりは、私の仕事に対しても感謝を述べてくださり、私は恐縮し、身が縮む思いがしました。私の仕事など、ささやかなものだと思いますし、めったに報

われることもありません。自分は、何かに貢献しているのだろうか？　何らかの結果を出しているだろうか？　自問自答してきましたが、ご夫妻にお会いして、新しい可能性が開かれたように感じました。どんな困難があっても、おふたりの励ましの行動は、困難をも「力を分かち合う働き」としての「詩」に変えてしまうのです。おふたりと何か特別な言葉を交わしたというわけではありません。でも、おふたりの言葉の奥に込められた思いや詩心が、その場にあふれていて、私は本当にうれしかったのです。いえ、うれしかったと過去形で表現するのは正確ではありません、おふたりと過ごしたあの時間は、まだ続いているのですから。

人を攻撃するだけの「腐った」言葉

正直に言いますと、今日の講演の原稿を書くことは、私にとって、かなりの重荷でした。何をお話ししようかと、しばし思い悩み、もっと時間がほしいと思い、日記を読み返したりもしました。私はニューヨーク州北部に住んでいますが、家の近くの森を散策したりもしました。今年の夏、故郷のニューメキシコ州を訪ねた際も、空を見上げ、山々を眺めては、さまざまな性質が織り交ぜられた「言葉の力」について考えをまとめようと努力しました。読み、考え、歩き、思索し、それでも、よどみなく書くことは難しく、悩みました。

私は、時間をかけて言葉を生み出すのが好きです。ぴったりの言葉を見つけ出したり、聴く人の心に最も届く表現を思い描いたりするのが楽しいのです。とはいえ、時間はどんどんなくなっていきますし、ふさわしい言葉がどうしてもまとまりません。

その上、アメリカはちょうど大統領選挙の真っただ中にありました。「言葉の力」について書くには、最悪の環境でした。アメリカでどんな言葉が飛び交っているか、少しでも知っている人にとっては、これは、言葉について考えることがいやになるような時期なのです。選挙戦の中では、「言葉の力」は、ただの「野蛮な武器」にまでおとしめられたかのようでした。それらの言葉には、詩心などかけらもなく、ただ相手を攻撃し、

非難し、糾弾し、否定する道具、つまり一種の暴力でした。言葉の最低の使い方でした。エマソンが「言葉の腐った用法」と呼んだものです。そのような環境の中では、言葉のマイナス面を実感せざるを得なかったのです。

けれども、池田会長と奥様との出会いのことを書いているうちに、これとはまったく違う世界へと引き戻される気がしました。書きながら、私は再びご夫妻とともにいました。そうして、文学の教師という自分の仕事に身を捧げることを改めて誓ったのです。ご夫妻が私にくださった揺るぎない「理解」と力強い「励まし」は、まるで音楽のような響きで、私の詩心を再び歌い始めさせてくださったのです。

文学というものが、ますます時代遅れの技術のように見なされる時代、そして、あまりにもしばしば言葉が単に人を操るための道具とされてしまう社会。そんななかで、私は、これらとは違う言葉を育て、養いたいのです。言葉が自然に育つために、ゆっくりと時間をかけて。そして、本来の意味での「言葉の力」を取り戻させたいのです。

「学び合える対話」ができる能力

（コロンビア大学の文学研究者）キャロリン・ハイルブラン（Carolyn Heilbrun/1926 - 2003/ 筆名はアマンダ・クロス）は、書いています。「『力』の真の表れとは、大男が小男や女性を殴ることではない。『力』とは、話すことが必要などんな行動にも参加できる能力であり、そのなかで自分の立場を尊重させる権利である」と。

私たちが目指すべきものは、オードリー・ロードが言うように「互いを支配しようとしない対話」であり、互いが存分に発言できるような話し方です。そのためには、一人ひとりが、自分の考えを吟味し、どうすればそれが伝わるかを、じっくり考える必要があるでしょう。他者がそこから学び取れるような話し方で、自分の考えを表現しなければならないのです。そこに、ミュリエル・ルーカイザーの言う意味での「真実の詩」があります。すなわち「分かち合い、与えること」です。

「詩心の力」で沃野へと変えよう

池田会長は、私たち皆が詩人となって、言葉を適切に使うよう呼びかけておられます。書く場合でも、話し合いでも、心をこめた会話でも、あるいは思慮深く、思いやりに満ちた沈黙においても、そして機敏な行動においても、言葉をふさわしく使うよう期待しておられるのです。

池田会長が教えておられるのは、最も素晴らしい人間関係、すなわち「詩人」としての人間同士の絆です。なぜなら、詩人とは「一個の人間に秘められた限りない可能性の輝きを見る」（世界詩人会議への寄稿から）人のことだからです。

大地震と津波の余波の中、極限の苦しみを味わった人たちと、そして深い同苦の心で被災者と連帯する人たちと。その間で、「詩心」が何度も何度も呼びかけ合い、応答し合っています。

この「詩心の力」を最大に発揮させたならば、どんな荒れ地であろうとも、必ずや沃野へと変えていけることでしょう。私はそう信じているのです。

（Sarah Ann Wider／米エマソン協会元会長）

（本稿は、２０１２年10月９日、宮城県仙台市の仙台国際センターで行われた講演をまとめたものです）